

# ふるさと風

第89号 (2013年10月)

風に吹かれて (67)

白井啓治

『恋花のもつと紅く咲いてランラン』

60年ぐらいい前の事になるだろうか、♪花を召しませランラン…♪という歌が流行った。恋花よ紅く咲け、何てことを思っていた時に急に思い出された歌である。こんな歌を思い出しながら、そう言えば夜の銀座には花売り娘と呼ばれる人が随分大勢いた事を思い出した。

今でも昔娘の花売りが何人かいるようなことを紹介されたことがあった。80歳過ぎの花売り娘に声を掛けられたら、どう返事をするのかなと思ってしまう。

戦後復興の目覚ましい銀座の夜には、それこそ無数の花売り娘がいた事を覚えている。当時17、18歳の娘だった彼女らの何人かが今でも銀座の街角に花を売っているのかと思うと妙な感じがする。

だが、かくいう小生も古稀を迎えたというのに恋花の紅く咲け、などと呟いているのだから花売り娘ならず「花咲けず爺さん」の世迷言とでも言われそうである。

恋花のもつと紅く咲け、等との言葉が浮かんだのは、最近本棚から古い本を引っ張り出しては読

み返しているのであるが、その中である女流作家の本の中に書かれてあった一節の、妙に頭に残っていたためであった。

「…女の軀には、いろいろな記憶が積み重なっていく。その記憶のひとつひとつは決して消えることはなく、女の軀の奥の奥の中や女の顔の皺の中に刻み込まれて遺っていく…」

これを読みながら、女に限らず人の軀にはいろいろな記憶が刻み込まれ、遺されていくものであるが、刻み込まれた記憶は、そのすべてが都合よく物語化されて、痛みも快楽化されて遺されていくんだらうな、と思ってしまった。しかし、こう思ってしまうのは私だけなのかも知れない。

肉体と精神に刻み込まれた苦痛に近い記憶も、時の移ろいと共に物語化が美化されてきて、その中で懐かしさだけになってしまふ。記憶が懐かしさ化されると、それは何時しか忘却の棚に仕舞われることになるようである。

さて、このふるさと風の会の兄妹である劇団ことば座の東京公演がもう間近に迫ってきた。公演の内容に関しては絶対的な自信をもって臨んでいるのであるが、メジャーに無名の地方の小劇団が東京で公演を持つというのは、集客に相当のエネルギーを強いられる。しかもエネルギーを使っ

も確実な集客を得ることは難しい。毎日祈る気持ちで奔走している。

そう言えば、祈るといふと神仏に願うという意味に多く使われるが、祈るとは本来他力本願する事ではない。「祈る」を辞書引くと神仏に願うの他に、心から望む・希望することと出ている。神仏に祈りを捧げると言ったようにつかわれるが、この場合の神仏に祈るといふのは、神仏に願いを叶えてくれと頼む事ではなく、私はこういう望みを持つているのでそれを達成するための努力をします、という誓いを述べる事が「祈る」という事の本来なのだろう。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

希望や夢を実現させるためには、そのような結果が望めるように自助努力をすることが必要であることは言うまでもない。つまり、祈りというのは、その夢や望みを達成するための努力を自分自身に誓うという事なのだろう。

## 『麗好き』の落とし穴

菅原茂美

もし、人類が滅亡するようなことがあれば、その原因となるものは、何だろうか？

色々考えられるが、巨大隕石衝突など、宇宙規模の重大事件を除き、最大の原因となるものは「生命力の先細り」ではないかと私は考える。では、その先細りの誘因は、一体何だろうか？

結論からいえば、それは「文明の暴走」だ。人類は思いあがって、自然の摂理を無視し、未踏の地を荒らしまわす。抗生剤などを求めて、自然界に潜んでいる微生物を揺り起こすと、突然牙をむいて逆襲してくる。エイズ（後天性免疫不全症候群）・サーズ（重症急性呼吸器症候群）など、放つとけば自然界で、何ら悪さをしないものを、野生動物などを捕獲し、実験動物や、ペット化などとすると、その体内に潜んでいた病原体が、突然変身して牙を剥く。

更に焼畑農業や森林伐採など続け、化石燃料を多用すると、地球温暖化を促す二酸化炭素の劇的な増加を招く。その結果、気温上昇・海面上昇や、温帯でもマラリヤなど熱帯の伝染病が蔓延する。海水は酸性化と、酸欠状態を招く。自然林を伐採し、針葉樹など植林すれば、海でプランクトン

の生態系が崩れ、食物連鎖が崩壊する。海藻や小魚・ひいては、マグロまでその数が減少する。そんな諸々が重複すると、人類の生命力は、自ずと弱体化する。先を読まない欲望の暴走が、人類滅亡の素因となる。

そして人類は、資源が枯渇するまで略取を続け、安楽を求めて健康管理を疎かにし、美食に溺れ、肉体労働が減少し、機械に頼り過ぎる。これも人類弱体化の静かな推進役である。

無節操な化学物質（洗剤・医薬品・消費薬品など）の大量消費により、文明国ほど、男性の機能低下を招き、生命力の先細り現象を招いている。女性ばかりが強くなって哀れるかな、オスども……。ま、オスが弱体化すれば、多少は戦争など少なくなり、世界平和に貢献か？

そして、もしかすると人類滅亡の切り札となりうるのが「多剤耐性菌」の出現。私も、牛の乳房炎対策で、耐性菌に非常に苦しめられた。人類は病原菌を殺そうとして、多くの抗生剤を使用してきた。しかし敵もさる者、命が危なくなると、サマリと遺伝子を変換して、抵抗力を増し身をおかす。人類だけが知能が優れていると考えるのは、とんでもない早とちり。あんな、ちっぽけなバイキンも、人知を超える生存のための知能を持つ。なめたら、いかんぜよ。

\* \* \*

今、私が最も心配していることは、商業主義がいたずらに清潔を訴え、人類の抵抗力をそぎ落としていくことだ。周りが少し汚れているくらいが、継続的抗原刺激となり、天然の抵抗力を増加する。赤ちゃんは何でも舐めて、抵抗力を獲得する。ただし、喘息持ちの人は、ダニなどアレルギーを徹

底的に除去して清潔に保つ必要があるが、一般的には、人体に共生するバクテリアまで悉く殺すのは本末転倒。共生菌を殺したら、人体は生存が不可能となる。度を越した清潔願望は猿智慧に過ぎない。

人体の細胞数はおよそ60兆個。人体に共生する細菌数はおよそ600兆個といわれる。人体はそれら細菌の遺伝子の活動を借り、健康な生活が営まれている。細菌は何でも殺せば、身辺が清潔で健康が確保されるというのは、全くの幻影。抗菌加工で、何でも周辺を綺麗にすれば、健康が約束されるどころか、かえって、抵抗力の弱い箱入り娘が増えるだけで、真に危険である。商業主義に惑わされてはいけない。

世界は勿論、それに気付かないわけではないが、経済盲従が、それを阻止できない。果てしなき快樂追求が、人類滅亡へとつながる。

\* \* \*

資源獲得競争は、『おれが今取らねば、誰かに先に取られる。』という深層心理が強く働き、侵略戦争にまで発展する。今の今をどう乗り切るかにキウキュウとして、未来の展望などありやしない。有限の資源は、未来永劫に、子孫孫まで生存に必要で、今生きている人類のみが使い果たしてよいものではない。

千年後の生活物資など、その時になれば、その時代の人々が、何とかするさ。心配は不要。そう思うかもしれないが、昔、がんなど30年もすればとつくと解決されているだろう。好きなタバコを止めるなんてナンセンス……。とか言っていたが、全くの当て外れ。いまだにがん死亡率を大きく押し上げている。

一方、資源浪費競争は、人類の先細りに直結する。苛烈な浪費競争の果ては環境の汚染・資源枯渇の自殺行為であり、くたびれ儲けと共倒れを招き、緑の惑星が、荒涼たる砂漠へと変わり果てる。

交通機関の発達や、生活物資の工夫改善は、体を動かすことなく、難なく移動ができ、苦痛を伴わずに、安楽な生活ができる。筋肉だけではなく、体の全ての機能が、退化する。そして腑抜け人口が大爆発。『歩無し将棋は負け将棋』。

\* \* \*

さて、なぜそんな話になるかを、生命誕生にまで遡ると、生命の本質がそうであるから、後々まで後を引いていると考える事ができる。

楽して得する根本原理は、生命誕生の時から、ずっと今日まで続いていたDNAの戦略だ。他から栄養源を奪って己のみが生きる。これぞ生き物の本性。いかに高等動物に進化して、民主主義だ！平和主義だと高唱しようが、その基本は変わらない。それゆえ人類から戦争は、永久になくならない。「性善説」は妄想にすぎない。

悲しいかな「性悪説」を信じる他ない。日本は軍隊を持たない平和憲法の下、自由だ！民主主義だと平和ボケ。少数政党乱立。6年間に総理大臣が6人も変わる。国家のセキュリティも穴だらけ。「隣に倉建ちゃ、こっちは腹が立つ」とも言われる。戦後、日本が世界第2位の経済大国に成長すると、近隣諸国は虎視眈々。領土や知的財産を奪うなら『今でしょ』……とくる。

話を戻し、生命誕生以来、要するに弱肉強食の生存競争がすべて。まず己が生き延び、己のDNAのコピーを増やす。これが全ての生物の本性である。聖人君子がどんな高説を唱えようと、所詮

1個の「生命を帯びた物質の塊」即ち全生物は、1個の単細胞の子孫なのである。以来何億年経とうが、当然、みなその血を引いているので、植物も動物も、バイキンも高等動物も、基本はみな同じ。過酷な生存競争で生き延びようとするDNAの子孫なのである。

本論に入る前に、私のゴンボ掘り性から、まず生命が誕生した現場に遡ってみたい。

生命はその誕生以来、ほぼ40億年かけて、幾多の試行錯誤を経、今日の生存システムを開発してきた。現在生存している全ての生命が、多難の試練をくぐり抜け、生き抜いてきたという事である。自然界にふんだんに存在する放射能など障害物件に、簡単にDNAが破壊されないように進化した者のみが、現在生き残っているということ。要するにその試練に打ち勝つ事のできなかった生命は、残念ながら既にこの世から消滅していったという事である。

ではその試練とは、何か？

それは、一個体なり「種」なりが、周りから十分に栄養を継続的に摂取できない状態に陥ることであろう。個体なり集団が、天敵に対抗できなくなったり、弱肉強食の生存競争に耐えきれなくなると、自ずとその数を減らし、滅びて行く。その他、感染症や気候変動で生活環境が激変し、通常の採食ができなくなったりすることが滅亡の主原因となったことであろう。その他、有毒ガス・酸欠状態など異常事態が継続的に連発すれば、生理機能が対応できなくなる。更に、種内の繁殖相手が獲得競争・擬態や保護色等の遺伝子変換を、機敏に獲得できなかった……などが考えられる。

【カンブリア紀以降、今日までの5億年間に、海

水の酸欠などで、全生物の90%前後が絶滅した事は、5回も存在する。】

さて、生命誕生の最初に遡れば、有機化合物は、複雑な反応を繰り返し、化合促進↓崩壊を繰り返し、安定的に同じ「成長・分裂」を繰り返せる塊のみが、生命（代謝と生殖が持続可能）を帯びた物質の塊として生き残った。既にこの段階から、他の塊を横取りして、生存のための戦いが始まっている。40億年前、生命誕生の現場に踏み込んでみたい。

浅い海底が生命誕生の「故郷」といわれる。その故郷には、空気中にあつた簡単な一次有機物である炭素化合物（雷放電などで、炭素と水素は化合し「炭化水素ができる」）が、雨とともに海水中に溶け込み、沈澱し、原始水圏の中で化学反応を繰り返し、複雑な有機物に成長して行くことは、実験的にも、証明されている。その有機物の塊（コロイド）が、粘土層に吸着され、濃縮されて、一つの塊（コアセルベート）となり、膜状の「皮」が被さり、原初の「細胞の如きもの」が誕生した。膜の中で、複雑な反応を繰り返す中に、何億年という長大な時間を経て、タンパク質・核酸など高分子化合物も、物質そのものの発展法則に基づき、安定的に、代謝・増殖を繰り返す「コアセルベート」が、原初の生命誕生へと発展していく。（これがオパーリンの「生命の起源」説である）

原初の海で最初に誕生した生物は、そのエネルギーを、酸素ではなく、硫化水素などを利用する「嫌気性菌」であった。現在の空気にはおよそ21%の酸素が含まれているが、これはその後の植物が光エネルギーを元に、水と炭酸ガスから炭水化物を作った「カス」である。酸素は原初の生物にとって猛毒であった。

原始生物が増殖し、浅海で光合成を活性化すると、大量の酸素が産生される。その酸素原子は3個結びついて、地上30km付近で「オゾン層」を形成し、太陽からの有害な紫外線を吸収し、動植物のDNA破壊を防いでいる。

【動植物は太古の昔から陸上に生息しているように思うかもしれないが、現在、地球誕生から46億年、生命誕生から約40億年経つが、海中の植物が生産した酸素がオゾン層となり、太陽光の有害な紫外線が地上に届くのを防いでくれなかったら、動植物は陸上に進出することはできなかった。(海中なら有害紫外線は海水で遮られるので、DNAは破壊されない。)

それゆえ、海中植物が生産したオゾン層のおかげで、やっと生物は陸上進出ができた。まず植物が陸上へ進出するのは、生命誕生から34億年後、即ち、今から約6億年前。そして、脊椎動物としては、魚類が川を遡って、内陸まで進出し、鰓(えら)を肺に、鰭(ひれ)を足に変化させ、「両生類」に進化して、やっと上陸できたのは、今から約4億年前である。そして両生類は完全に水から脱出して「爬虫類」へと進化し、恐竜が全盛時代を迎え、陸上を闊歩するのは、ほぼ2億年前のジュラ紀である。その頃、哺乳類の元祖は、爬虫類から分離し、温血と胎生を獲得し、合わせて皮脂腺が変化した乳腺により子育てをする術を獲得した。しかし、新生の哺乳類の元祖は、恐竜に怯えながら、ネズミくらいの大きさでウロチョロしていた。今から6500万年前、中米ユカタン半島に、直径10kmの巨大隕石が落下し、恐竜が滅亡した。空いた空間に今までの弱者が、のさばり出す。哺乳類全盛時代の幕開けである。

そして丁度その頃、哺乳類の中から、我々の属

する「霊長類」が食虫目から分離し、およそ700万年前、ついに直立2足歩行する「人類」が誕生する。人類は今、大きな顔をしているが、動物界では、末席に座るべき新参者である。】

\* \* \*

さて、脱線が長過ぎたが、エアコンなどから漏れ出たフロンなどにより、オゾン層は破壊され、大きな問題を醸している。南極上空にはオゾンホールが作られ、地上生物のDNAが破壊される。これも文明暴走の一場面である。放っておけば、全生物の絶滅につながる由々しき問題である。

人類は、脳味噌を膨らまし、全ての生物が生存しにくい環境造りをセッセッセと繰り返してきた。それゆえ私に言わせると、人類は種を絶やさず永続しなかったら、脳味噌の働きを、しばらく制限しろ…と言いたい。経済優先の過酷な競争社会など下の下である。それゆえ今急がねばならない重大事項は、木にぶら下がり、鼻提灯で居眠りばかりしている南米の「ナマケモノ」を少しは見習うべきである。人類が長生きしたかったら、ナマケモノの弟子になる事だ。

【後藤新平の言葉に、人はその死に際し、

『財を残すものは下、名を残すものは中、人を残すものを上とする』…とある。】

英才教育とか、効率主義とか、一見優れたように見える頭脳が、人類滅亡への拍車をかけている。私の主張を偏見だ！と嗤う人がいるかもしれないが、日本の英知を集めた霞が関や永田町が、食糧自給率39%のこんな惨憺たる日本を作り上げたではないか。食糧の安全保障こそ、民族存続の基本である。借金1000兆円の国家を作ったのは誰だ？ 後は野となれ山となれ！死んだ後のこと

## ター文化館

### 2013 CONCERT SERIES

- 10月27日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル
- 11月 3日 La Corde Vibrante
- 11月 4日 新進気鋭若手ギタリスト4人の会
- 11月10日 啼鵬《バンドネオン》おがわゆみこ《オカリナ》  
伴奏:高野行進《ギター》
- 11月24日 北口 功 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

は、俺は知らない。今の今、我が省庁が潤えばそれでよい。代議士の俺だけが高禄を食めればそれでよい。何が秀才だ？  
秀才は不要。常識が通用する平凡こそ重要だ。それゆえ、能天気や極楽トンボこそ、人類が永続するために必要不可欠の「役者」であろう。文明はスピードダウンしなければ、人類はそのうち息切れする。凡庸が人類を救う。

最後に、人類滅亡につながるかも知れない男性の「性」を決定する「Y染色体」の行方が現在赤信号。女性の性染色体「X」は2個あるのも、もし何かの事情でどちらかが傷つければ、正常な方のX染色体が直ちに修復にかかる。両方同時に傷つくことはめつたにないので、X染色体は安定である。ところが男性の性染色体はXとYとの2個なので、もしY染色体が傷を負えば修復してくれる相手がいない。こうして生物にオスというものができて何億年か経ち、Y染色体はポロポロに崩れ落ち、現在人類のY染色体はX染色体の10分の1まで短縮した。理論上、あと460万年経てばY染色体は消失してしまうという。現に「アマミトゲネズミ」のオスにはY染色体は消失したが、種は存続している。霞が浦のゲンゴロウブナは、雄がいらない。環境が厳しくなると、メスのうちの誰かが雄に早変わりして子孫を残していくのだという。結構生物は、雄がいなくても「雌性生殖」で種は絶える事はないらしい。しかし、これは人類にも当てはまるかどうかは、不明である。

## 水泳る茨城の国

木村 進

今年「常陸国風土記」が書かれて丁度二三〇〇年という節目の年で県内各地で記念行事が行われている。

この風土記の茨城郡に関する記述の中に「水泳（みづくぐる）る茨城の国」という記述がある。

茨城の言葉の起こりを説明した後に書かれているのだが、単に枕詞や修飾語のように思われ、あ

まり注目されていないようだ。

「昔、山の佐伯、野の佐伯といふ国巢がゐた。

普段は穴を掘ってそこに住み、人が来れば穴に隠れ、去った後でまた野に出て遊んでゐた。

まるで狼か梟でもあるかのやうに、あちこちに潜んでゐては、物を盗み、祭に招かれても様子がをかし、風習がまったく異なつてゐた。

あるとき、大の臣の一族の黒坂命が、野に狩りに出て、あらかじめ彼らの住む穴に茨の刺を施し、突然、騎兵を放つて彼らを追ひ立てた。佐伯たちは、あわてて穴に逃げ帰つたが、仕掛けられた茨の刺がからだ中に突き刺さり、あへなく皆死んでしまつた。このときの茨から、茨城の名となつた。

諺に「水泳（みづくぐる）茨城の国」といふ。」

（口訳・常陸国風土記より）

この茨城の名前の起こりの後になぜこんな言葉を書いたのだろうか？

このまま解釈すれば茨城の国が一般にこのように呼ばれていたということなのだろう。

「みづくぐる」というのは単なる茨城にかかる枕詞であろうか。

またこの後に高浜の隣の「玉里」（玉里村、今は小美玉市）について書かれている。

昔、倭武の天皇（ヤマトタケル）が来て井戸を掘り、きれいな水が湧きだした。

「そして、「よくたまれる水かな」とおっしゃつたので、この里の名を、田餘（たまり）といふやうになつた。」

もともと玉里（たまり）は田餘（たまる）と書いていたし、たあまりむらと呼ばれていた。

百人一首に在原業平が詠んだ歌が載っている。

ちはやぶるかみよもきかず竜田川

からくれないにみづくぐるとは

かなり有名な歌なのだが、解釈がどうもピンとこない。一般に解釈されている説明は

「紅葉の美しい竜田川（現奈良県生駒郡）は、唐紅の鮮やかな赤い色が川面に写しだされ、（生地が赤く染まった）くくり染のような美しさだ。こんな美しさは神代から聞いたこともない。」

といわれています。でもこれは古今集の業平の歌を後に、藤原定家によつて「みづくぐる」とは」と「くぐる」を「くくる」に改竄されて百人一首に載せてしまつたからで、「みづくぐる茨城の国」という言葉を藤原定家は知らないの、水をくぐりに染にしていると勝手に解釈してしまつたのではないかと思う。

奈良の都から古東海道を、遠い北の最終国「常陸国」に来る道のりを想像してみて下さい。

横須賀の走水から千葉の君津に東京湾を舟で渡り、市原（上総国、市川（下総国）から柏や我孫子近くでまた舟にのり対岸に渡つて、布佐から更に利根川を渡り利根町に入ります、そしてまた舟で信太郡に着くと、また大きな内海が待っています。

これが現在の霞ヶ浦です。ここも波が風いである日はそのまま舟で高浜までやってきて、波が荒れている時はかすみがうら市に上陸して高浜で恋瀬川を渡つて茨城郡の郡衙（石岡）に到着したのでしよう。常陸国風土記の書かれた頃にはまだ土浦などの陸地側はあまり交通不便で利用されなかったと思つています。

石岡の浜Ⅱ国府浜Ⅱ高浜 では男女で走り回つたり、舟遊びなども行われていました。

「水泳る」(みづぐる)には川や湧き水など水が豊かであるというメッセージを感じる事ができます。

ですから、業平には、紅葉の美しさが川面に映え、清らかな川の流れの中を紅葉の葉がきらきら輝きながら流れたり、映し出された葉の色が川面の水の流れて揺らめいて美しさが何倍にもまして見えたのでしょうか。

伊勢物語を書いたとされる業平は、その記述によれば下総国から隅田川を渡って武蔵国に入ったように思います。隅田川では今の東京スカイツリーの近くに「業平橋駅」があります。

でもこれが「東京スカイツリー駅」となってしまうと何かさみしいですね。業平の名前を残してほしいという運動もあって今は二つの駅名が併記されています。

名にし負わばいざ言問はん都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

「言問橋」「吾妻橋」が隅田川には架かっています。百人一首などに何も知識のない私がこんなことを書いても真偽のほどはわかりません。

さて、この業平の竜田川の歌を調べていたら落語の話が出てきました。面白いと思いましたが、ウイキペディアより転載します。落語の題名は「千早振る」です。

「先生」の異名を持つ岩田の隠居が茶を飲んでみると、なじみの八五郎が訪れてくる。

娘に小倉百人一首の在原業平の歌の意味を聞かれて答えられなかったため、隠居のもとを訪ねてきたという。

隠居も実はこの「ちはやふる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは」という歌の意味を知らなかったが、知らぬというは沽券にかかわると考え、即興で次のような解釈を披露する。

江戸時代、人気大関の「竜田川」が吉原へ遊びに行った際、「千早」という花魁に一目惚れした。ところが千早は力士が嫌いで、振られてしまう(千早振る)。振られた竜田川は妹分の「神代」に言い寄るが、こちらも「姐さんが嫌なもの、わっちも嫌でありんす」ということをきかない(神代も聞かず竜田川)。

このことから、成績不振となった竜田川は力士を廃業、実家に戻って家業である豆腐屋を継いだ。それから数年後、竜田川の店に一人の女乞食が訪れる。

「おからを分けてくれ」と言われ、喜んであげようとした竜田川だったが、なんとその乞食は零落した千早太夫の成れの果てだった。

激怒した竜田川はおからを放り出し、千早を思い切り突き飛ばした。

千早は井戸のそばに倒れこみ、こうなったのも自分が悪いと井戸に飛び込み入水自殺を遂げた(から紅(くれなゐ)に水くぐる)。

八五郎は「大関ともある者が、失恋したくらいで廃業しますか」、「いくらなんでも花魁が乞食にまで落ちぶれますか」などと、隠居の解説に首をひねり通したが、隠居は何とか強引にハチ公を納得させた。

やれ安心と思った所にハチ公が、「千早振る、神代も聞かず竜田川、からくれなゐに水くぐる、まではわかりましたが、最後の『とは』は何です」と突っ込んだ。とっさの機転で「隠居はこう答えて

た。  
「千早は源氏名で、彼女の本名が『とは』とわ」  
だった」

この竜田川は実在の相撲取りで、女には目もくれず真面目に稽古に励み、当時の最高位である大関となった。しかし、昇進を果たして後に遊郭で騒動を起こして関取を廃業して実家の豆腐屋になった。そして数年後に女を井戸に突き飛ばして殺してしまった。まあこれも落語のように女が入水自殺したのかもしれない。

まあ業平の歌がこんな落語に取り上げられるくらいだから、この歌の解釈も難しいということなのだろう。

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一  
摘みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさ  
との風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・  
オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちし  
ています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel 0299-55-4411

## 祭 伊東弓子

斯う涼しい風が吹き始めると、あの暑さが思い出される。その中で繰り広げられた祭、縁日が恋しくなってくる。其処には佛がいらつしやるからだろうか。神が御出だからかな。夜店の灯りに釣られて行くのだろうか。あの音が胸を騒がせ足を動かすのかな。一年を通して縁日、祭がやってくる。何かに引かれるように出かけて行く。人は何を求めて縁日、祭に集まるのだろうか。

立春が過ぎると待ちに待った春、三月は玉里五千石を守る雷電宮の祭、四月は岡地区の観音様、金塚地区の観音様のご縁日、五月は小川の赤身之地蔵尊のご縁日、高崎の館山神社の祭があった。子供の頃から六十年以上も経つと大分様変わりしたけれど行かすにはいられない。

六月末から七月に入ると各部落の入口に、竹二本を建てしめなわを張る。神を迎える準備だろうが、その情景に安心する。此処に人がいる。みんなで纏まっていく力がある。という思いからだ。飾りが済んで一休みしていた平山地区の人が話してくれた。「霞ヶ浦の川上の方から御神輿が流れてきたそうだ。大分昔の事だという。漁で忙しいこの部落の人は岡地区に頼んで貰ったという。それが素鷲神社だそうで、これから祝い金と酒を持って行くところだという。頭が上がんないんだよ」と話していた。高崎の八坂神社の祭も細々と続いている。松山、部屋地区の葉師様の祭は「うどん祇園」と父が言っていた。菜種を油屋に持って行くと今年初めての現金が入る。麦も出来る。麦藁で御輿を作って部落中を練り歩く若衆の声が響いてくる様だ。今年も喪中なのに能くも出歩い

たものだと思いがらも、鳥居を潜らないで賑わいの中にいるだけよと言いつつ私がついて行った。夏の間は嫁いだ先の荒川沖の祭に行つた。子供を連れて行く私達を待っていてくれた姑（はは）がいた頃は行く喜びが大きかった。駅の西口は水戸街道、松並木、陣屋などがあって古くからの町だ。御輿や山車があった。元気のいい人の群が続いていた。東側は新興住宅地帯で祭はないので、西口の町へみんな連れ立って行つた。姑も義理の兄妹も亡くなつて今は淋しくなつた。その頃東口が開かれ

大型の店や道路が出来て、祭も始まつたと聞いてはいても躊躇して出かける気持ちにはなれなかつたが十数年が過ぎた。今年も主人と一緒のつもりで出かけた。山車も御輿も狭い町内には入らず駅前通り百米位の所を行つたり来たりしていた。囃子手は女ばかり、笛、太鼓、鉦をならしている。おかげ、ひよつとこ等踊り手は中に隠れて影が薄かつた。前の両角に鉦叩きが粋な姿で柱に凭れ掛り、内股を開いた格好は、何か嫌らしさを感じた。こういう囃子方もあるのだろうかと思つた。

あまり日をおかないで小川の祇園まつりに行つた。小川三町という頃より河岸と商店で栄えた名残を感じる祭だつた。古い大町通りから新しい小川バイパスの所迄、商店が店を出し、露店商が並んで賑わいを作っている。その前を行き来して店に並ぶ物を買って食べる。ゲームを楽しむという姿が大半だ。子供を連れて来た三十五、六年前とは一寸違う感じがした。食べ物味が濃くなつたし量も多くなつた。工夫する玩具が姿を消している。女達が山車や御輿の回りで華やかに声を出す。今の時代そのものだろうか。そんな中で

人の波に流されているようだった。突然「財布がないよ」と孫が言い出した。婆さん二人は大慌てだった。捜そうにもこの人込みの中でどうするか。子供八人、婆さん二人が四方に分かれ、お巡りさん話す事、人の足元を見て行く事を確認して捜し出した。子供達は真剣其の物で分かれて行つたのに、私は内心見つかるとは思えない。拾ってくれる人がいても届け出てなんかくれないんじゃないかと否定的な事ばかり思っていて、捜す事に身が入っていなかった。少し経つと「わあい、あつたよ」と戻ってきた。本当か…と一瞬疑つた。休憩所のお巡りさんの所へ女の人が届けてくれたという。「なくさないようにね」との託けがあつて、名前は言わなかつたとの事だつた。本当によかつた。何よりも子供達にとつてよかつた。これから注意するだろうし、人を信じる事も出来たろう。一瞬心が凋んだが今年の夏の素晴らしい出来事だつた。

子供達が一番楽しいと膚で感じたのは高浜の祭だつた。親戚があつて知り合いがいる。いとこ、はとこと一緒に参加出来た事は楽しみに喜びが加わつてあと迄、余韻が残つて今でも話題になつている。規模が大きいから出来るのか、子供の参加を大切にしてくれていた。他からの子供の参加も気持ちよく受入れていた事は大きい。車に乗って叩き手を身近に見、笛の音を聞き、かけ声を一緒に交し合う。「ここは高浜、良い所」「元氣を出していきましょう」「もつともつと声出して」など中年の女のリーダーと高校生、中学生、小学生の女の子達の一日の祭は、休憩時間でも隣り同志に座つたり、菓子を貰つたり、お喋りがはずんでいた。心の中で孫達は太鼓を打ち、笛を吹き、鉦を鳴ら

していた事だろう。帰り時は菓子の袋を土産に貰って家路についた。満足気な表情だった。露店商が二つしかなかった。近隣の大きな町の祭で皆客の多い方へ店を出すようだ。もう五、六年こういう状況だがそれが子供達を祭の中に充分に力を出してきているのではないだろうか。あれから二ヶ月も過ぎたのに未だに、あの日の様子を姉弟で再現し合っている。自分達でお祭をした満足感が尾を引いている。大人はこういう場を子供達に与えたいし、伝えていきたいと改めて思った。

石岡の祭には楽しい思い出がない。昭和十九年九月九日(石岡の祭の三日目)父の戦友が亡くなった。小笠原の母島近辺でアメリカの魚雷に船をこわされ、沈んでいく数分の中で石岡出身の友は父と同じ名字の人で「助けて助けて」と叫びながら海の藻屑と消えて行った日だった。終戦後父は命日の九日にお参りに行ったが助かった自分の身が辛く当家へは三年だけお参りを止めたといっていた。敬老の日が祝日となった十五日を三日目として十三、十四、十五日と祭の日が変わった頃、子供をつれて祭の中で雨に打たれ、帰るに帰れなかったアーケードの下の雨宿り、目に入った情景も言いようのないものだった。酔った男を殴る蹴る三昧の酷いものだった。そして又又変って土、日、第三月曜の敬老の日となった。祭三日目に身近な若い人が事故で亡くなった。そんな辛い祭にも幼い子達の誘いがあるからやってきた。今年は露店商が町の両横に広がって、商店も店を出し一寸工夫された様子を感じた祭だった。町の人も、近隣の人も「石岡はだめだ」「だめになった」と言っていないで一工夫してください。私達の若い頃は石岡は文化の中心地だったので。

その他にもあちこちで盆おどりが行われた。地域おこしといって補助金を貰った催しもあった。この頃は人を集める方法なのか食べ物のコーナーが多い。そしてサービスマン過剰の度合いが多すぎる。卑しい姿、浅間敷姿を見る事も多い。それでもやり続けて行く事が必要なのかな。力を合わせないと今は簡単に壊れてしまうのだから、目を瞑っても皆に合わせて行くのがいいのだろうか。

あちこちの祭の中で喧嘩はつきものだったにも拘わらず次の年も人は集まってくる。日中仕事をし疲れきった体で集まってくる。そこにはどんな魅力があったのだろうか。これから「私達が育て上げていく祭をさがしていきましょう」と呼びかける一人です。

#### 平将門を訪ねて

小林幸枝

十月二十三、二十四、二十五日の三日間、両国のシアターX(カイ)で、常世の国の恋物語として、美浦村に伝わる平将門伝説「菫萱姫(さくらひめ)物語」を上演します。

私は平将門を演じますが、その役作りの為に、将門ゆかりの地を訪ねてみました。

#### ・将門公苑

平将門は、延期三年(903)に、石岡ではおなじみの平の国香の弟良将の子として常総市(旧石下町)向石下の豊田館に生まれたとされています。平将門が本拠地としていた豊田館跡地が小さな公園として整備されています。常総市には、将門ゆかりの町として「石下将門まつり」が行われています。

平将門もしくは将門の父良将が埋葬されていると言われていますが定かな事は解かりません。全長70mの古墳で、古墳群の中では最大の大きさです。誰かの古墳跡に埋めたのかなと思いましたが、まさかそんなことある筈もないでしょう。将門の頃にはもう古墳などは作らなかつたので単なる言い伝えなのでしょう。

#### ・六所塚古墳

第五代執時頼が民政安定のためにこの地の先靈を慰めんと豊田四郎の供養碑を建てた際、執奏勅免を得て碑の建立を命じて建長五年(1253)に造られたもの。鬼怒河畔の神子女台地引手山にありましたが、堤防改修でこの地に移されました。

#### ・平将門公赦免供養之碑

平将門公赦免供養碑は、もともと鬼怒川沿岸の引手山に蔵特の板碑3基とともにあったものが、後に新石下の妙見寺に移され、明治四年に妙見寺が廃寺となった際、現在の西福寺に移されました。

#### ・平将門公赦免供養碑(西福寺)

将門ゆかりの地を歩いてみましたが、特別具体的なものがあつたわけではありませんが、ゆかりの地を歩いてみたというだけで気分は将門になってくるように感じました。平将門に関する知識は台本を読んだ方がはるかに色々な事を知ることが出来ますが、時代は違っても将門が歩いたであろう地を実際に歩いてみる事で、今迄とは違った将門の人物像を想像することが出来ました。



何もなかったとしても、歴史の地を歩いてみると色々新しい思いも湧いてくるのではないでしょうか。そんな事を思った将門巡りでした。

## 幸町の武甕槌命さま

兼平智恵子

大きな被害をもたらした日本列島縦断の台風十八号の最中、石岡のおまつりは多くの皆さんをお迎えして無事終了することが出来ました。今回は石岡駅前通り(御幸通り)での出店の規制がなされ、まるでその道路を舞台のようにして、華やかな人形や山車が、そしてお囃子や踊り、獅子舞が皆さんを大いに楽しませてくれました。

見学の皆さんがゆったりとカメラを向けたり、集中して見入ってる姿が印象的でした。私にとりましては、すでにご紹介しました人形にそれぞれの思いを寄せながら、また各町内の皆さんの祭りに対しての意気込みを感じながら楽しむ事が出来ました。今回台風の影響で途中から会所で待機していた人形もありました。

さてシリーズでご紹介しています山車の上に乗る人形について、残すところ三体になりました。その中の、今回は幸町の武甕槌命さまです。

幸町は旧六号国道の南玄関口として、土浦方面より恋瀬橋を渡り二つ目の信号を左に入ります。なだらかな坂道(三五五線)が続きます。間もなくまたV字路左に入ります(水戸街道)。この二つの道路のある町並で、現在の町名では国府六・七丁目、総社二丁目となっております、戸数は百七十軒余りということです。

町内には、常陸国の国府が置かれた時代「日月、星」を祭った「府中三光の宮」が造られ、その一つである日天宮が水戸街道通りを前にして鎮座しています。府中時代にはこの日天宮前通りのやや下ったところに幸町見附門があり、現在登録文化財になっています(株)府中眷の長屋門はこの見附門を模したと伝えられています。

武甕槌命さまに関しては、まだ、おまつりの余韻を抱きながら、当会報のふるさと風の会員、打田さんの町内ですので語って頂こうと思いましたが、幸町の区長さんを紹介頂きました。区長さんからは、小貫建具屋様に聞いて見てくださいとの事、そして小貫様からは、是非、坂の上の池田様に聞いて見てください。池田様は生憎お留守でした。そこに息子さんがお帰りになり、町内の年配の方に聞いて下さったりご協力頂きましたが、はっきりした事が得られませんでした。それではと、まだ仕舞ったばかりの人形と山車を見せて頂くことになりました。大変申し訳なく、おまつり最中に伺って聞いておけばと、後悔しきりでした。

三日後の日曜日午前八時、おまつりの青年部長さんである鈴木様と池田様と、まず人形のある倉庫へと。そこには重さ二七キロもある大獅子をはじめとして順に重さが軽くなっていく四台もの獅子が睨みをきかせていました。

武甕槌命さまは和紙と木製の本体から外され、仕舞われていました。昭和二七年山車完成に合わせ、東京で購入されたもので、木札には、人形師東京 東雲斎三代目 大澤舟泉作 と墨書されてありました。昭和六三年の年番の時に修理されているそうです。今回のおまつりには三日間勇姿を見せていました。

そして次は山車小屋に案内して頂き、三日前に苦勞しながら仕舞われた山車小屋入口の三本の横支え棒をまた苦勞しながらの開閉。なんと山車に乗っての見学をさせて頂きました。初体験、見上げていた山車から、見下ろしています。早速、山車内に書かれている墨書文字を写す。

## 祝 講 和 記 念

紀 元 二六一一年

昭 和 二十六年十月 起

昭 和 二十七年三月 竣了

発起人 三十名の列記(現在三十番目の池田茂様がお健在、

大工 島田章五郎 他四名、

車大工 松田萬吉。

那珂湊から購入した樺材で造られたシンプルな山車の右側、左側の二面に鶴の彫り物が、格調の高さを誇っていました。この彫り物は以前あった屋台に対で彫られていたものだそうです。そして石岡型の山車の造りをとどめている一番古い山車の一つとなっているそうです。

日本神話で経津主命と共に天照大神の命を受けて出雲国に下り、大国主命を説いて国土を奉還させた武甕槌命さまは石岡の南玄関口、幸町で天下泰平、国家安穩を守って下さっています。

打田様、区長様、小貫様、そして人形や山車を見学させて頂きました池田様、鈴木様貴重な体験、感激ございました。御礼申し上げます。

(参考資料・石岡の地名

・庭灯り網ほおずきひとつ

智恵子

## 【特別企画】

### 虚構と真実の谷間

打田昇三

#### 第六章 功績の値打ち(3)

その頃、源頼朝は鎌倉に居ただけで国民の為には何の役にも立っていなかったけれども、木曾義仲が平氏を都から追い出したニュースを見て愕然とした。誰が決めた訳でも無いが自分が源氏の頭領で「功成る一将」は自分だと思いついてる。

同族だが万骨組の義仲が自分を越えて「一時の人」になったのが許せない。何よりも、先に平家が後白河法皇に出させて命令によって頼朝は「逆賊」にされているので、これを何とかしなくてはならない。頼朝は法皇に手紙を出して、自分の忠誠心を売り込み、木曾義仲を討討するように頼んだ。法皇も商売上手であるから、自分に尻尾を振ってくる奴は最大限に利用する。

木曾義仲にとって不幸だったのは、木曾山中で育った為にクダラナイ形式主義に拘る公家と宮廷とに見下され、特に権威にしがみつく公家の領地を没収しようとする義仲への反発が強かった。全国的な飢饉で兵士の食糧を確保する為に略奪行為に近いことが行われて評判が落ち、撤退する平家軍との合戦で都が戦火に焼けた恨みを向けられるなど、苦勞が多いところに野心家の頼朝が裏工作で後白河法皇と結んだ為、占領軍の立場が不安定になったことである。その状況を察した義仲は、神戸に集結した平氏に使者を送り協力して鎌倉の頼朝を討とうと提案したのだが、平家が是を受けざる筈も無く、結局、「都から平家を追い払う」という大功を立てながら都に孤立してしまった。つま

り木曾義仲には「一將功成り万骨枯るる」の原理が拡大して適用された結果、自分でも良く分からない運命に押し流されて「一將もこうなりや万骨にされる」ことになったのである。

後白河法皇は源頼朝のゴマ摺りに屈して、自分が平家に言われて出していた「頼朝追討の命令」などコロリと忘れ、木曾義仲に平家追討を命じて西国に出陣させていながら「木曾義仲を討て！」と頼朝に命じた。頼朝は弟の範頼と義経を将として木曾義仲追討の軍勢を西に向かわせた。後白河法皇の不審な動きを察した義仲は平家を西に追い詰めながら途中から引き返し、法皇の御所に火を放つてから家無しになった法皇を親切に幽閉したので、これが小規模なクーデターになった。

その頃、頼朝が派遣した東国の軍勢は既に都に迫っていて一隊は琵琶湖の南端・瀬田から進撃しており、一隊は平等院近くから宇治川を越えて攻め寄せた。時に元暦元年(一一八四)正月二十日である。このうち宇治川を越えて攻め寄せる鎌倉軍の中で佐々木高綱と梶原景季による騎馬の先陣争いが行われた。木曾義仲の軍は、宇治川を義仲が押さえ瀬田の陣は今井四郎兼平が守っていた。

押し寄せる鎌倉軍の軍勢は二万以上であったらしいが、木曾義仲の兵力は平家攻めから引き返した後でクーデターの戦闘も経っているので数が少なかったと思われる。日本外史の記録も一合戦した後の残りが数百としか書いてない。サーブスして多めに見積もっても千数百しか居なかったのである。二か所の守備陣も瞬く間に崩されて、僅かな生き残りが京都と滋賀の境界辺りを琵琶湖に沿って北陸方面へ逃れることにした。それを鎌倉の軍勢が執拗に追跡してくる。矢を射ながら追っ

くるから、まぐれでも当たれば減る。

此の時に木曾義仲に従って奮戦していた勇士に板額御前のような女武者が居たのである。「巴」とも「御前」と言い、板額御前と同じように「と書きたいところであるが、どの本にも「色白で美人」とあるから本当に美人だったのであろう。

「板額さんとは違うわよ！」と怒られそうなので明確に「美人」と書いて置く。巴御前は義仲の側室でもあり、二人の間には「義高」という男児が生まれている。義仲は同族の頼朝に睨まれていたから摩擦を避けるため少年の義高を人質として頼朝の許に差し出していた。頼朝は政子夫人との間に生まれた長女・大姫の婿として義高を鎌倉の営中に住まわせていた。この若夫婦は仲が良く幸せであったのだが、頼朝の野心と疑惑がこの若者を不幸のどん底に落とす。この話は因果応報をテーマとした第三章でも触れたが、源頼朝の冷酷さに起因する生涯最大の失敗を強調するために改めて再録しておく。義仲の死で義高も危なくなった。

状況を知った大姫は密かに義高を逃がすことを決めた。木曾から付いて来た近従の海野幸氏という武士が義高に化けて寝床に布団を被ったりして空芝居をしている間に、大姫は義高に女装をさせそれを侍女たちが困んで屋敷から馬で脱走させたのである。木曾義高が乗った馬は防音装置付きの靴を履いていたから誰も夕方まで「大脱走」に気付かなかったけれども、隠し通せるものには無く人質逃亡を知った頼朝は搜索隊を幾組も出して残酷にも「見つけ次第に斬れ！」と命じた。五日ほど経ってから追手の武士が戻ってきた。木曾義高は既に入間川を越える手前で見つかかり討ち取られていたのだが、その事実は伏せられていた。

しかし、この秘密が耳敏い侍女に嗅ぎつけられ大姫に告げられたので悲しみの余り大姫は飲食を絶ち、泣き暮らす日々であった。当然ながら大姫は衰弱してゆく。予想外の展開に慌てたのは頼朝と政子夫人である。特に政子夫人は旦那と自分の失敗を棚に上げ、追手として義高を探し出して斬った家来に因縁をつけ責任を転嫁させて恨んだ。「主君の命令でも(義高を見つけたら)内密に大姫に知らせるのが筋であろうに、断りも無く斬って手柄顔をするのが許せない!大姫の病気はアイツの所為です。アイツを罰として殺したく思います」と、頼朝に迫った。呆れた夫婦である。

何しろ後に旦那や息子まで消して天下に号令した怪女であるから白眼を剥かれると恐い。頼朝も止むを得ず義高の暗殺を命じていた堀の藤次という武士に質してから、実際に義高を斬った藤内光澄なる者を捕らえて晒し首にした。勿論、首と胴は綺麗に分別されている。正に典型的な万骨の例であるが酷いものである。それでも大姫の鬱(うつ)病は治らなかつたけれども義高の後を追つたのは十四年後だそうであるから、歴史書によつては早く死ねばよかつたように書いてある。他人事になると世間は薄情である…

話を木曾義仲に戻すと京都郊外の山科から関所が置かれた逢坂山を越えて、つまり現在の国道一号线や東海道本線などが通る辺りの標高三百メートル程度の山道を逃れて琵琶湖の沿岸部・大津市郊外に來た。其処で残り少なくなつた…と言うより何度、計算しても僻地のバスの乗客程度しか居なくなつた味方を見て、木曾義仲は巴御前に「戰場離脱」を命じた。拒む巴御前に「最後の場に女連れで居たと言われては心外である…」と心にも

無いことを言つて去らせた。そして最後には木曾義仲と側近の今井四郎兼平の二騎だけになつた。今井兼平は、源氏同族の領地争いから頼朝の父親や兄から迫害を受ける幼い木曾義仲を匿つた地元豪族・中原兼遠の息子であり、巴御前の兄でもある。長兄の樋口兼光らと義仲の乳兄弟になる。

木曾の軍勢が僅か二騎だけになつても敵は団体で迫つて来る。狙いは木曾義仲の首である。是を戴ければ武士としての名が挙がるので「この二人だけだよ」と言つても敵は減らない。今井兼平は義仲に前方の松原台地を指さして「此処は私が防ぎます。殿はあの場所にてご自害なされよ…」と言つて、背中の胡籙(やなぎいし矢筒)に残つた七、八本の矢を頼りに防戦することにした。どう計算しても矢が足りない。義仲は「共に死のう」と言うが「敵に討たれては恥辱です」と急がせた。

ところが、「さらば…」と涸れ田の畔を伝つて台地を目指す義仲の馬は氷結した深田に脚を踏み入れて動きが取れなくなつてしまつた。数に限り有る今井兼平の矢を避けた追つ手の武士たちが次々と義仲に迫る。思はず今井兼平のほうを振りかへつた義仲は敵の矢に内兜(うちかぶと)の内側つまり顔面を射られて馬上に伏した。兼平は追い付けない。敵は大声で「日本国にて鬼人と恐れられた木曾義仲殿を討ち取つたり…」と自慢げに名乗りを上げている。「今は是まで!」今井四郎兼平は「是から日本一の剛の者が主君のお供をして自害するから、東国の方々よ、良く見ておけ!」と叫んで太刀を口に含み、馬上から飛び降りて壮絶な最期を遂げたのである。

一方、義仲に言われて戦場を脱した巴御前は、途中で三十騎ほどの追つ手の武士団に遭遇した。

武士団の長は六十人力だと自慢していたのだが、巴御前は百人力の女性だというデマが飛んでいて家来が三十人と主が六十人並みで合計九十、これで何とか勝てる…と敵が計算を始めた。すると六十人力の主が見栄を張つて「俺一人で大丈夫だから手を出すな…」と言つて、マイナス四十で巴御前に向かつて来た。巴御前も受けて立つ。通常は弓で射合うのだが敵が接近戦で来る。巴御前も是に従つた。野次馬の立場になつた家来はポーツとして見ているしかない。

武士の接近戦は太刀を振るつて戦うのが普通だが女性を意識したのかどうか、相手が素手で向かつてきたから巴御前も素手で組んだ。すると相手は女性の黒髪を掴まえて腕に巻き、腰に差した短刀で首を斬る戦法で来た。巴御前は「女に組討ちを求めるほどの武士が、途中で太刀を抜く卑怯な真似をするか、妾(わらわ)メカケではない…」を誰と思う。木曾山中で育つた者ぞ。合戦の手下に致せ!と叫んで拳骨を振るい相手の太刀を打ち落とし、兜を剥ぎとり顔面を抑えて首を簡単に切り落とした。相手は急に首が無くなつたので仕方なく「ドウだ」と馬から胴だけが落ちてきた。

この様子を見ていた三十人の家来たちは「だから言わないことじゃない」と、巴御前が悠々と立ち去るのを丁寧に見送るだけであつた。日本外史では、この出来事を木曾義仲に別離する前として、負けた武士の名も伝えられているけれども平家物語では人物の名が違う。どうせ万骨組に入るのだから本人の名譽の為に省いておく。

こうして戦場を脱した巴御前は、故郷の木曾山中に戻り木曾義仲や兄たちの為に祈る日々を過ごす

していたようである。やがて平家が滅んで源氏の世となった。鎌倉に居た源頼朝の耳に、誰が云い付けたのか巴御前が伝わった。敵に回した以上は、犬猫まで消さないと安心出来ない頼朝であるから「鎌倉へ出頭せよ」と言ってきた。臆すること無く出かけて行つた巴御前は、森五郎という武士に身柄を拘束された。頼朝は斬るつもりである。この時に重臣の和田義盛が「…どうせ処分するなら私に下さい」と言つたかどうか知らないが、美人で戦さに強い女性を妻にして良い男児を産ませたい…と申し出た。

この話が先に紹介した板額御前の場合と似ているから、どちらかにパクリの疑いもあるが両方とも幾つかの史書にある。年代的には巴御前の方が先である。義盛の要望に対して「義仲を討たれた恨みを持つているから、何をやるかも分からない」と許さない頼朝に対して、和田義盛は一族が頼朝に尽くしてきた忠義の事績を並べてようやく許可して貰った。正確には先に述べた平家(城氏)の板額御前を妻にと願ひ出た阿佐利興一の場合と少し状況が違う。巴御前は木曾義仲との関係から頼朝を深く恨んでいるであろうし、美人であるから頼朝も狙いたいのが政子夫人の手前、言い出せない。頼朝の処置が微妙である。それらの条件を克服して目的を達したのは、和田義盛の功もさることながら、この有力な一族が桓武平氏良茂流(平国香の末弟)の名門だったからである。

斬られるところを助かったのであるから当然かも知れないが縁談が決まった後の巴御前は現役時代の武勇伝が嘘と思えるほど淑やかな女性となり和田義盛との間に立派な男児を生んだ。その名を朝日奈三郎義秀と言ひ剛力の武士とされた。和田

義盛の勢力は強大化してゆく。これを憂慮したのが北条一族である。既に源頼朝は冥土に送られ、重臣の梶原景時も消され、源頼家とそれを取り巻く比企一族も潰された。畠山重忠も既に此の世には無い。北条氏が天下を執るに当って差し当たり邪魔なのが和田氏である。北条氏は三浦一族を取り込んで離反させ和田義盛を討つた。

鎌倉幕府三代将軍と言つても形だけで、実権は北条氏が握つていた建保元年(一二三三)、「和田合戦」と呼ばれる鎌倉幕府内の争乱により和田一族は滅ぼされた。北条九代記には「謀反」として記録されているが、善悪は別にして権力者の関わる対立では相手が全て謀反にされる。これも変則的な「万骨の法則」であるから諦めるほかは無い。巴御前が生んだ朝日奈三郎は父親に従つて縦横の活躍をしたけれども、父子共に滅ぼされた。

板額御前が甲斐国へ行つてからの記録は無いが現地では平穩に暮らしたものと推定できる。巴御前の場合には桓武平氏系の三浦一族である和田氏に嫁して恵まれた環境に在つた訳だが「和田合戦」という思いも掛けぬ出来事(実は北条氏の為)不幸のドン底に突き落とされた。源平盛衰記には「巴御前は泣く泣く越中に越え…此にして出家して巴尼(ともえのあま)とて、仏に花香を奉り、主親、朝日奈(子)が後世弔ひけるが、九十一まで持ちて、臨終目出度くして終りにけるとぞ」と有る。女性ながら武士として死線を越えてきた身に波乱万丈は当然だが、最後は大往生だったことになる。

板額御前と言ひ、巴御前の場合と言ひ、負けた万骨組ながらも史書に名を留めることが出来たことはやはり女性の強さかも知れない。話の行き掛かり上、主題から遙かに離れてしま

って申し訳ないが、兄貴の貞盛に美味しいところを持つていかれて常陸国に取り残されたと思われ平繁盛の行方を捜すのが目的である。既に述べたように常陸国では繁盛の子で平貞盛の養子となつた維幹から六代目の義幹までが、国府の判官職である大掾(たいじょう)を世襲し廣大な領地を保有して日本一の豪族と言われていた。しかし、肝心の繁盛がどうなつたかは何の記録も見当たらない。せめて「子孫だけでも…」と探してみたら越後の国で「城氏」が頑張つていて、平清盛が天下を取つた時代には「桓武平氏北陸出張所長」として女性の板額御前まで化粧もせず商売に励んでいた。この系統は繁盛の子でもズバ抜けて武勇に優れていた平維茂の子孫である。

普通に考えれば、繁盛は常陸国に残つて日本の土地持ち(当然、金持ちでもあつた筈)の御隠居さんとして、後年の紀伊国屋文左衛門のように小判を大盤振る舞いして暮らしたのであろう…と貧乏人は思う。しかし、それに類する話は四十年も経つてから純金を溶かして書いた大般若経を比叡山に奉納しようとして世間を騒がせた―それも懺が生えたような事件の恩賞目的と言われた…ことが記録されているだけである。

内容に荒唐無稽のような記事があるから余り引用はしたくないのだが「前太平記」によれば平貞盛が藤原秀郷と連合して将門と対決することになつた際に、貞盛が繁盛に四千の兵を与えている。先に述べた将門方の藤原玄明が坂上近高と二人で農民に化けて山から脱出する偽芝居を演じた際にそのインチキを見破つたのは繁盛の部下らしい。その他、繁盛は兄の軍の先鋒として縦横の働きをしている。恩賞が与えられて当然なのである。

天慶三年(九四〇)三月二十五日に、平将門の首を高々と掲げて(余計な心配だが防衛利は注入したのか)いかめしい東国武士たちが行列を組んで都にやって来た。その先頭には平貞盛が居て直ぐ後ろには、平繁盛が居たことになっている。平氏一門三十余騎が前衛となり軍勢の数は五万余(これはかなり大嘘の数字であろう)、藤原秀郷の一門は後陣となり一族五十余騎に軍勢も六万騎(これも実際には六百も居れば上等だと思いが)飾り立てて得意げに行進した。

三月二十九日に大袈裟な行事が行われて平貞盛は、いきなり従五位下に叙され右馬助(うまのすけ)に特進した。これは運輸省の係長であった貞盛が局長に昇任したようなものである。そして御褒美に常陸国と下総国が与えられた—と言うが、親王の給与を賄う常陸国が与えられる訳がない。多分、兼ねて常陸大掾か下総大掾に任じられたのであろう。両国には大掾職の下に権大掾(ごんのだいじょう)が置かれるから、地方自治に支障はない。高官の天下りと同じで給料だけ払い込みになるのである。役所には振込先の金融機関名を届けておけば良い。貞盛は都に居たと思う。

繁盛のほうは上総守になったとあるが、上総の国主も親王であるから上総介になったと解する。これは正六位相当の待遇である。当面の恩賞でありやがて繁盛は陸奥守になった記事が複数ある。内容に不満があったかも知れないが、全く恩賞を受けなかった訳では無いと思う。それでも「一将組」の兄と「万骨組」の弟では差が大きい。貞盛は始めのうち、地元に近い場所に就職した繁盛に對して、自分が貰ったり、国香から相続したり、或いは合戦で押領した土地を管理させていたのだから。其のうちに、繁盛も遠隔地勤務を命じら

れたから常陸国は息子に任せた：繁盛の子は常陸国に土着し、都の有力者に膨大な賄賂を贈って国府に就職し是を世襲化して大掾氏となった。

### 【風の談話室】

十月の声を聞く前に、突然に秋風が吹き初冠雪や霜の便りが届いてきた。

本當にどうなっているのだこの陽気は、と大声を出したくもなる。

猛暑の年は、大寒波が来るのだと先日気象予報士が話をしていた。

本當かね、といたくなるが、日光などの紅葉の知らせを聞くと、もう冬かと思ってしまう。

そう言えば、つい先日までは虫達が高音を張っていたのであったが、今はもつその声もか細く聞こえる。冬間近ということなのだろう。

### 《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

#### 何時か行く道

田島早苗

最近葬儀に関する考え方が様変わりして、生前葬を体験したり、子孫の負担にならないようお墓も要らないという人が多くなったとか。是は世界的な流れのようで、土葬が主流だった中国では墓地が不足して高騰、一般の人には手が届きにくくなり、遺骨をいずれば溶けてしまう容器に入れて、花壇の花の下や芝生の下に埋め、文字通り何年か

先には土に還るといふ埋葬方法が広がりつつあるという。

散骨の希望を遺言する人も多くなり、いずれば溶けてしまう容器に入れた遺骨と花束を海に投げ入れ、船に乗った遺族が読経と涙で送る事業が展開しているらしい。何処までも抜け目ない商売人の目が光っている。

忙しかった九月も終わりの日、美浦村ボランティア連絡協議会の主催で、「美浦村の人口減少」「美浦からの企業撤退」「美浦村の災害時における備え」などについて村長のお話を聞く会が持たれた。

どの地方でも人口減少は避けられない問題だが、美浦村でも去年八月一日現在で一七三二六人と減少の一途を辿っている。美浦村の特徴として、男八九〇二名に對して女が八四二四名と男性の方が四七八名も多いが、これは、結婚できない男性が増えているためだとか。

村では三年前から出会いの場を作ったりして、婚活支援を行っているが中々実績が上がらず、カップルは出来ても結婚まで漕ぎ着けたのは皆無だという。十万円のお祝い金も用意しているのに残念!

子供の数も減り続け、陸平貝塚に関わりの深い安中小学校では、生徒数九十九名になり存続の危機に立たされている。村の人口の二三、〇六%は七五歳以上の老人だという。もちろん我が家でも八十代の老夫婦がパーセント向上に寄与している。

働く場所がない美浦村に優秀な若者が定住するはずもなく、安中地区に誘致した、プリア栽培企業が作業員を募集しても、シルバー人材センターの日当八百円より安い賃金で、美浦村からの応募

は少なく、近隣の市町村から通ってくる作業員ばかりだという。更に追い打ちを掛けるように、「花王研修所」が撤退するというニュースが囁かれ、村民の不安は高まるばかり。

花王研修所は十六ヘクタールの広大な敷地に二千名以上が泊まれるハウスや娯楽施設も完備され全国各地の花王関係の研修や、イベントに利用されてきた。ゴージャスなホテルの様な部屋からは、霞ヶ浦や筑波山の眺望が素晴らしく、見学に訪れた時、仲間達は一様に羨望の溜め息をついたのだった。

この研修所の年間の維持費は五億円かかるという。時代の流れと共に東京で研修したい若者が増え、高額な維持費を掛けて美浦村の研修所を続ける意味が薄れ、撤退を決めたという。十一月にはその後の施設をどう活用するのか、譲渡に関する明細が渡されるらしいが、引き受け手のめどは立っていない。介護施設という声が上がっているらしいが、よほどの資産家が入る高額な施設でなければ採算が合わないだろう。やはり我々には縁のない話になりそう。

近隣より地価も安くほとんど災害にも縁の薄い美浦村に進出してくる企業がきつとあるはずだと、熱気溢れる質疑応答が予定時間過ぎまで続けられた。

自分では老いた実感が乏しいけれど、何時死んでもおかしくない立派な高齢者。自分達の入る墓を作ってしまった私達、子供達には迷惑かも知れないが、たまにはお墓参りに来てねと頼んでおくしか方法はなさそう。

(でも私は散骨に憧れている)

## 《一寸一言、もう一言》

縄文語に学ぶ

打田昇三

鈴木健先生から「日本語になった縄文語」という大著を頂戴しているが浅学不才の身では「猫に小判」になりかねない。この小判を二八蕎麦が食べられるぐらいに両替してみようと、拝読した中で「螺贏（すがる）」の話に興味を持った。

古事記には無いが日本書紀に有る話で、残酷な王とされる雄略天皇が近臣の少子部螺贏（ちいさこ）を集めるように命じたところ、螺贏が間違えて大勢の嬰兒を集めたという。鈴木先生は雄略天皇が集めたかったのは螺贏娘（すがるおとめ）、腰細の娘（こ）であろうと看破された。短絡的に表現させて頂くと先生は雄略天皇の話の中で「ス＝穴」「カリ＝カル」通う」という、古来からの縄文語を見出されたのである。ご研究に只々脱帽するのみ…。

日本草創期の「倭（わ）の五王」に雄略天皇は入っていないらしい。本籍地が中国だか朝鮮だかの豪族が日本に来て王朝を開いたのが西暦三百年代、推定される系統は王として崇神―垂仁、以下、実在と仮空が入り混じって蘇我王朝へ、大化の改新と壬申の乱を経て皇統は天智系から天武系に渡った後に桓武天皇により天智系が復活している。

それ以前から日本に住んでいた人民は、時に雄略天皇のような悪い支配者の圧政で「螺贏」のように痩せ細った暮らしをさせられたであろう。宮殿の美女は細くても良いが、働かされる民は細腰では居られないのである。

## 現生人類は混血で生き残った

菅原茂美

私が「風」に書き続けている「遙かなる旅路」の祖先を讃える気持ちは、7万年前アフリカを飛び出したホモサピエンスが、旧人と交わることなく、世界に拡散して、はるばるユーラシアの極東に辿り着き、我々日本人の祖先となった…その偉大なる旅路を讃えたいからであった。それは、新人類の解剖学や当時の遺伝子解析に裏付けられた確たる証拠に基づくものであった。

ところがDNA解析の技術が長足の進歩を遂げ、滅亡した旧人・原人の化石骨格からもDNA検出が可能になり、5年前の定説は今や反転しつつある。即ち、5年前までは、19万5千年前にホモエレクトス原人から枝分かれした我々ホモサピエンスは、全世界唯一種の純粋種で、現生人類はみな親戚のようなものであると言われてきた。しかし、現生人類と旧人の遺伝子解析を進めると、3万5千年前に滅亡したネアンデルタール旧人の遺伝子が、南部ヨーロッパや中東地域で現代人になりに濃厚に残存していることが分かった。アフリカでも旧人と新人との混血はあったらしい。しかもその遺伝子は免疫に関わるもので、新人類が広い分野に拡散するのに役立ったと思われる。ならば強い免疫を持ったネアンデルタール人はなぜ滅亡したのか…謎は深まるばかり。科学の進歩は急速である。もはや5年前の定説は「確定」ではない。常に情報収集に努めないと、時代遅れとなる。

## 【ことば座だより】

### 成功祈願「東京公演」

小林幸枝

10月23、24、25日、両国シアターカイでの東京公演がもう目の前に迫ってきました。

昨年夏、マカオでの公演が中止となって非常に残念に思っていましたところ、秋にはシアターカイでの東京公演が決まり、ヤツタと思つて喜んでいる中に一年があつたという間に過ぎ、東京公演が目の前に来てしまいました。

ことば座では、常世の国の恋物語百を目指して、ギター文化館を発信基地として七年間やってきました。その集大成が、今回のシアターカイでの公演となります。

ことば座の公演では、最初の年からオカリナの野口さん、パークッションの矢野恵子さんに担当して頂き、その後もクラシックギターの島直さん、ピアノの山本光さん、クラリネットの橋爪恵一さん達のお世話になってきました。

そして、私としては現代舞踊家の柏木久美子さんとの共演によって、舞う事の楽しさ、難しさを教えて頂きました。

今回の舞台では、もうそれは雲の上の人といえるヨネヤマママコさんとの共演を頂けることとなつて大興奮しています。

色々な人に支えられながらここまでやってきましたが、これまでの集大成として、何んとか大成功に終わらせられたらと思つています。

応援よろしくお願いたします。

気が付けば○○○○という事が言われる。

○○○○はいろいろな言葉が嵌められて使われる。

自分自身を振り返って今○○○○の単語を当てはめるとすれば、「もつと稀か」といふ事になる。

そして、古稀に気付いて、欲得の全てを捨てるのかと言えはさうではなく、寧ろ欲を膨らませ未練を肥大させて残りの数を数えてしまふ。

そのくせ、したり顔で「出得するも出得せざるも渠（かれ）も儂（わが）も自由なり、神頭は鬼面（おにづら）にならび、敗戦も当に風流なり」などとうそぶいてみたりする。

地位や成功や名声がなんだと言つてみるくせ、「その実地位や名声に必要以上に拘り、憧れる。

そんな己を冷ややかな目で見ている自分がいるのだが、それはまるで目へそが鼻くそを笑っている様なものである。

身の丈にあつたといふよりも己の身の丈を図りながらこの先を過ごしていかなければならないといふ聞かせている。

打田兄の歴史の嘘をテーマとした「虚構と真実の谷間」が、来月十一月まで終わる。二〇一一年一月号に始まり三十四回の連載となった。

打田兄には、一度千枚を超える長編に挑戦されるといひですよとお話して、千枚を必要とするテーマ「歴史の嘘」を掘り当てて執筆されたのであつた。一口に千枚と言つても、少しでも文章を書いた事がある方は長くお分かりであるが、それはそれは大変なこゝである。

連載は、来月の号までであるが、脱稿したのは昨年（二〇一〇年）の末であつた。

しかし、打田兄への敬意はそれだけではなく、歴史の嘘が終わるや否や、次は石岡について大きな

関連を持つ「平家物語」の打田私訳に取り組まれた事である。平家物語は全十一巻百二十句に及ぶ一大歴史物語である。現在巻一まで進んでいるが、先はまだまだ長い。

平家物語の内容の時代考証をしながらの私訳を行っているのだから、後輩としてもつ脱帽（だつぱん）しか言ひようがない。

小生も古希を迎え「ことば座の東京公演などを、年甲斐もなく企画製作する事となつたが、聊か身の丈に余ると後悔するものもないとは言えないが、やれる時に、やれる事を精一杯やるしかないだろう。それでは生きていく甲斐もないだろう」と、半分負け惜しみにはなつていく。

歳を考えると「敗戦も当に風流」とは言つていられないのであるが…。

（つたか）

## 《ふる》

アンソング集・書芸会史料館のお店より。

（ギター文化館通）

看板娘（大）「うらり」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-24-2063

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

# ことば座東京公演

10月23日(水)・24日(木)・25日(金)

劇場シアターXカキ

伊藤道郎に捧げる日本組曲と三つのジェスチャー

## 朗読舞劇 平将門伝説: 芍薬姫物語

三つのジェスチャー(伊藤道郎のテンジェスチャー/ヨネヤマママコのダンスマイム/小林幸枝の手話舞)がホルスト作曲「日本組曲」を軸に集結し、平成日本の舞物語を創造!!

脚本：演出 白井啓治  
音楽監督 橋爪恵一  
編 曲 山本 光  
舞台監督 久保田由香里  
舞台美術 兼平智恵子  
小林一男  
衣 装 熊谷敬子  
照明&音声 シアターX  
ヘアメイク 松橋亜紀  
DTR撮影 小松 進  
アナウンス 平山恵美子

出演  
(三つのジェスチャー)  
・ダンスマイム ヨネヤマママコ  
・テンジェスチャー 柏木久美子  
・手話舞 小林幸枝  
朗読 しらみひろが  
マイム語り 明神任土米  
演奏  
ピアノ 山本 光  
クラリネット 橋爪恵一  
ビオラ&ヴァイオリン 中小路淳美

入場料：自由席 4,000円 (障害者及び小中高生 3,000円)

お問い合わせ&お申込みカーニバルカンパニー 090-2564-3198 fax042-522-6135

ことば座(白井) 080-3125-1307

10月24日(木曜日)スペシャル講演会「伊藤道郎…継承されたメロードと音楽」

(16時~18時：入場無料)

(司会) 小峯健治 平山恵美子

- ・「日本組曲」と伊藤道郎 講師：東京音楽大学教授 武石みどり
- ・伊藤道郎の魅力 講師：井村恭子 佐藤桂子 伊藤弘子 伊藤胡桃
- ・今、ダンス・アーカイブが面白い！ 講師予定：正田千鶴 片岡康子 加藤みや子
- ・テンジェスチャーデモンストレーション

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 Tel 0299-24-2063 fax 0299-23-0150